

農福連携を行う事業所における利用者参加による農村地域との関係形成過程の実態と協働の意義

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学院工学研究科都市系専攻 公開日: 2023-04-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寺田, 凌真 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2011589

農福連携を行う事業所における利用者参加による農村地域との関係形成過程の
実態と協働の意義

THE REALITY OF THE PROCESS OF BUILDING RELATIONSHIPS WITH RURAL AREAS
BY HANDICAPPED IN AGRICULTURAL WELFARE FACILITIES AND THE
SIGNIFICANCE OF COOPERATION

建築計画・構法分野 寺田 凌真
Architectural Planning & Building System Ryoma TERADA

農業と福祉の双方の課題を解決する農福連携の取り組みが農村地域におけるあらたなまちづくり手法として注目されている。本研究では、事業所の利用者参加による農村地域との関係形成過程の特徴、利用者と地域の協働の効果を分析した。農村地域での地域との協働における利用者の主体性が地域内での居場所の創出、地域課題の解決に寄与するとともに、利用者と関わる社会的弱者の地域参加を促し、包括的なコミュニティを形成することを明らかにした。

Efforts of agriculture-welfare collaboration to solve problems in both agriculture and welfare are attracting attention as a new method of community development in rural areas. In this study, we analyzed the characteristics of the process of building relationships with rural areas through the participation of users of business establishments, and the effects of collaboration between users and communities. It was found that the initiative of users in collaboration with the community in rural areas contributes to the creation of a place to belong within the community and the resolution of local issues, while encouraging the community participation of socially vulnerable people involved with users and creating a comprehensive community.

1. はじめに

1-1. 背景・目的

近年、農業分野の担い手不足、高齢化の問題が深刻化している。高齢化と跡継ぎの不在は農家の離農を加速させ、農村地域における耕作放棄地は増加の一途をたどっている。一方で、福祉分野においては、障害者の雇用を推し進めるために、厚生労働省による就労継続支援 B 型事業所（以下 B 型事業所）をはじめとする就労系障害福祉サービスが充実してきており、一般就労への移行人数は令和元年に 21,219 人と平成 15 年の 17 倍まで増加している¹⁾。しかし、利用者の障害の特性やニーズの多様化によって、施設内での単純作業をはじめとする従来のサービス内容では対応しきれないという問題が表面化している。

これら農業分野と福祉分野の双方の課題を解決する策として、農福連携の取り組みを行う主体が増加している。その中でも両者の課題の解決だけでなく、利用者の社会参画の促進、地域活性化を目的に農業や地域活動を通して地域と協働し、まちづくりに取り組む事業所が注目されている。これらの取り組みは農村地域における空き家やコミュニティの希薄化などの地域課題を解決に向けて、社会的弱者である障害者が地域づくりの担い手になるという新たなまちづくり手法としての可能性を有していると考えられる。

本研究では、雇用契約を結ばないことから利用者の自由度が高く、幅広い活動が可能な B 型事業所を対象とする。各事業所の①利用者参加による農村地域との関係形成過程の特徴、②利用者と地域の協働の実態と効果、の 2 点を明らかにすることで農村地域での地域との連携手法、障害者をはじめとする社会的弱者の地域づくりへの参加可能性を示すことを目的とする。

1-2. 研究の位置づけ

農福連携に関する研究は、本田ら²⁾が運営方法や働き方の観点から A 型事業所と B 型事業所の比較を行っており、小柴ら³⁾は農業分野での障害者就労への進出パターンを 4 つの連携タイプに分け、各タイプにおいて経営に必要な要素を述べている。先行研究では農業分野又は福祉分野からみた就労の実態、運営方法などに関するものが多く、利用者に着目した事業所と地域との関係について述べられているものは少ない。しかし、国が 2019 年に発信した農福連携等推進ビジョンでは、「農福連携等を地域づくりのキーワードに据え、地域共生社会の実現を目指す。」⁴⁾と明記されており、農福連携に取り組む事業所における、利用者の地域参加の実態を明らかにすることは意義があると考えられる。

1-3. 調査対象の選定

本研究では、インターネットを用いて確認した、農業に取り組む滋賀県内の B 型事業所 74 事例のうち、

農村地域との連携を図るために積極的に地域協働の取り組みを行う7事例を調査対象とした。滋賀県は全国の中でも兼業農家の割合が高く、兼業農家による生活一体型の農福連携が特徴的である。また、農業の専門家による技術指導や6次産業化への支援、生産者と事業所のマッチング支援など行政による援助も充実している。調査対象の概要を表1に示す。

1-4. 調査方法

まず、事業所の活動実態、地域との関係性を把握するために運営者に事業所の設立経緯や利用者の作業内容、地域との取り組みに関するヒアリング調査を実施した。同時に、事業所や運営者のFacebook、広報誌を参照し、利用者の地域参加からみた活動の変遷を調査し、地域との関係形成過程の分析を行った。次に、利用者の地域参加の効果を把握するために【Ua-1】【Ra-1】【Rb-1】【Rb-2】の地域住民に利用者との関わりに関するヒアリング調査を行い、【Ua-1】【Rb-1】ではイベントに参加し、利用者の行動、住民との交流の様子を記録する観察調査を行った。

2. 農村地域との関係形成過程の実態

農村地域との関係形成過程の特徴を事業所と地域の立地関係、地域活動への利用者参加の観点から述べる。

2-1. 立地と地域活動への利用者参加による分類 (表2)

事業所と農村地域の立地関係は「市街地拠点型」と「農村拠点型」に分類でき、利用者参加タイプは「継続参加型」と「後発参加型」に分類できる。

- (1)市街地拠点型【U】：市街地周辺にある拠点での活動を経て、農村地域においても活動を展開する事業所。
- (2)農村拠点型【R】：農村地域に拠点を構える事業所。
- (3)継続参加型【a】：地域と関わり始めた当初から利用者が活動に関わる事業所。
- (4)後発参加型【b】：まず事業所と地域が関係を築き、その後から利用者が活動に参加する事業所。

2-2. 利用者参加から見た分類ごとの特性 (図1)

(1)市街地拠点型 × 継続参加型：市街地での活動を通して多くの利用者が主体的に地域と関係を築く。農村地域でもその繋がりが発展するため、農村での活動展開の速度が速く、利用者が初めから農村地域で主体性

- をもって活動できる。
- (2)市街地拠点型 × 後発参加型：市街地周辺で事業所と住民が関係を築き、農村地域での活動から利用者が参加する。初めは受動的な利用者が不特定多数の住民との活動を通して徐々に主体性を高める。
- (3)農村拠点型 × 継続参加型：閉鎖的な農村コミュニティにおいて活動を継続する中で利用者が時間をかけて地域との繋がりを深めることで、農業やイベント、日常生活などの幅広い連携が日常的にみられる。
- (4)農村拠点型 × 後発参加型：少数の利用者が事業所と農村地域が築いたコミュニティに参加する。特定の

表2：事業所立地と地域活動への利用者参加による分類

		〈利用者参加タイプ〉	
		継続参加型	後発参加型
〈立地タイプ〉	市街地拠点型	【Ua-1】	【Ub-1】
	農村拠点型	【Ra-1】 【Ra-2】 【Ra-3】	【Rb-1】 【Rb-2】

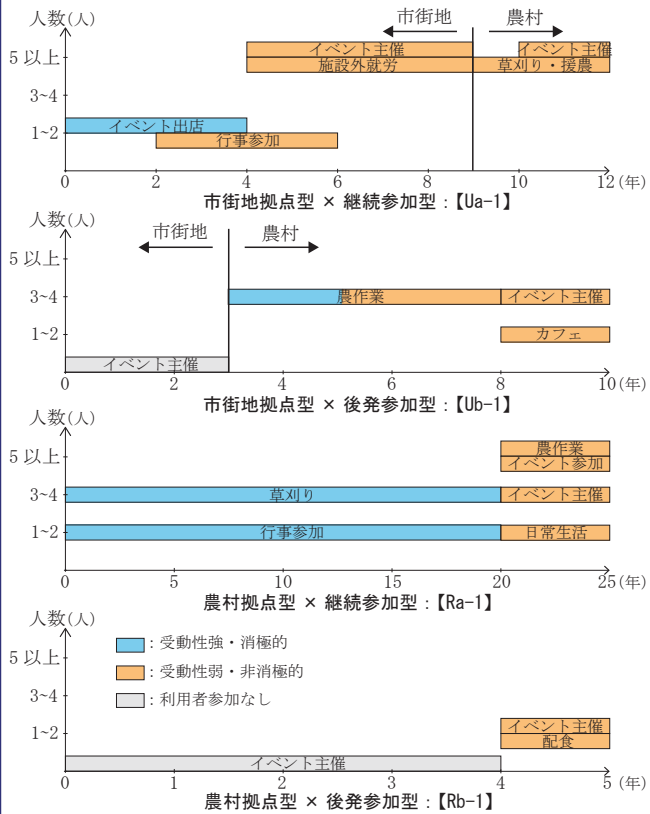


図1：分類別の利用者参加の特徴

表1：調査対象事例概要

※：色付きは地域との協働が行われている項目

施設名	【Ua-1】	【Ub-1】	【Ra-1】	【Ra-2】	【Ra-3】	【Rb-1】	【Rb-2】
設立年	2009年	2011年	1996年	2018年	2018年	2017年	2013年
運営種別	NP0法人	NP0法人	社会福祉法人	株式会社	社会福祉法人 (本体から分離)	社会福祉法人 (本体から分離)	NP0法人×2 株式会社
利用者人数	27名	14名	26名 (全体88名)	21名	12名	15名	24名 若者支援6名
平均工賃(2021年)	26,603円	17,136円	49,871円	35,427円	30,101円	17,860円	11,775円
他の福祉サービス	—	ケアプラン デイサービス 子ども支援	—	—	—	—	デイサービス 訪問看護
その他作業	—	—	パレット修理 蹄鉄磨き	—	—	—	木工、織物
農業	1次産業	○	○	○	○	○	○
	2次産業	○	○	○	○	—	○
	3次産業	○	○	—	△	△	○
イベント等	○	○	○	○	○	○	○

住民が参加するため、顔見知りの関係が多く、利用者は自由度が高く、主体的に活動することができる。

2-3. 利用者と農村地域の関係形成過程

分類ごとの特性を踏まえ、分類別の利用者と農村地域との関係形成過程について事例を取り上げる（図2）。

1)市街地拠点型 × 継続参加型

(i) 市街地での関係構築（図2-1） 【Ua-1】は設立当初は周辺地域のイベントへの出店、地域行事への参加によって、農家や住民に活動を周知している。特定の利用者には神輿や清掃活動を通して、拠点周辺地域との積極的な交流がみられる^{<1><2>}。2015年以降はイベント出店に加え、自らの農地で近隣住民や小学生に対して農業体験を企画するなど主催者側の役割を担い、2019年からは貸し農園、マーケットの企画・運営も行っている。利用者は農業体験の際に子どもに作業を教える^{<3>}、マーケットの運営を担ったり、他の出店者を手伝ったりする^{<4>}など、積極的に地域と関わる場面が多く、利用者の行動を介した幅広い繋がりが構築されている^[1]。

(ii) 農村地域での関係構築（図2-2） 【Ua-1】は2020年頃から農地の管理を請け負ったり、ボランティアで草刈りをしたりすることで農村地域との関係を築いている。草刈りをはじめ、農村地域で活動する利用者の主体性は高く^{[2]<5>}、農家から作業を褒められることも多い^{<6>}。利用者の主体的な行動が【Ua-1】が農村地域で活動を進める上で有効に働いている。

(iii) 農村地域での活動の展開（図2-3） 【Ua-1】は現在、農村地域内でイベントを企画するなど、活動を本格化させている。イベントは【Ua-1】と市内の有志で構成される協議会が企画・運営を担い、市街地でのマーケットに出店していた農家や店舗が多数出店している。利用者は竹テントの設営、子供に薪割りを教える、商品のPRを行うなど、幅広く活躍している^{<7><8>}。また、知り合いの出店者と交流を楽しむ利用者もみられる^{<9>}。

表3：【Ua-1】のヒアリング内容

[1]AさんとかBさんはほんとに自信つけて、いろんなとこに飛び込んで自分の売る場所とか居場所をどんどん作ってますよ。【Ua-1】
[2]草刈りがしたくてたまらないっていう利用者さんが勝手に草刈りに行くんですよ。さすがにそれは危ないからうちとしてもちゃんとやろうということが始まった。【Ua-1】

2)市街地拠点型 × 後発参加型

(i) 市街地での関係構築（図2-4） 【Ub-1】は活動当初はデイサービスを中心に行っており、デイサービス利用者と近隣の高校や幼稚園、他の事業所、ボランティアなど、あらゆる主体を交えた農業体験を企画し、連携を図っている。一方で、当時、B型事業所は開所されておらず、地域との関係構築に障害者の参加はみられない。

(ii) 農村地域での関係構築（図2-5） 【Ub-1】は

2016年から農村地域の耕作放棄地で蓮を栽培している。作業にはこれまでの農業体験参加者が多く参加しており、地域の景観向上に繋がる蓮田の再生は農村地域の住民の参加も促している^{<10>}。利用者はこの頃から活動に参加しており、多くの住民と共同作業を定期的に行うことにより、徐々に主体性を身に付け、互いにやりがいや居心地の良さを獲得している^{<11>}。

(iii) 農村地域での活動の展開（図2-6） 【Ub-1】は2018年より、蓮田やその近隣で地域住民に向けたイベントを企画している。イベントでは蓮田の見学会や出店、住民の有志による演奏のパフォーマンスなどが行われる。日頃の農作業に参加している利用者は太鼓や踊りの披露、出店での販売を通して、交流のある住民と積極的に関わる^{<12><13>}。

3)農村拠点型 × 継続参加型

(i) 農村地域での関係構築（図2-7） 【Ra-1】は設立当初から、自治会の草刈りや村祭りへの参加を通して地域と関係を築いている。両者の関係は年に数回の行事に限られるが、草刈りには多くの住民が参加するため、利用者を含めて毎回参加することで利用者は地域全体で認知されるようになった^[3]。【Ra-2】【Ra-3】は地域と関わり始めて間もないため、今後も利用者参加を継続的に続けることで利用者の主体性の獲得、地域との新たな連携が生まれる可能性をもつ^{[4][5]}。

(ii) 農村地域での活動の展開（図2-8） 【Ra-1】は2017年より、高齢化によって農業の継続が難しくなった地域の農家から農地の管理を引き受けている。主な管理作業は【Ra-1】が担い、住民は自分の行きたい時や人手が必要な時に作業に参加するなど柔軟に関わっている^[6]。作業への継続的な参加を通して多くの利用者と住民が顔見知りの関係になっており、その繋がりをさらに深める工夫もみられる^{<14>}。

また、コロナ禍の際には地域の住民が【Ra-1】内でマスク作りを一緒に行い^{<15>}、住民と利用者でBBQ大会を定期的に開催する^{<16>}など、新たな繋がりが生まれるとともに、人手が足りない運動会や神輿担ぎへの参加、【Ra-1】の新しい作業所の土地の提供など、様々な困りごとを相互に助け合う関係が構築されている。

表4：【Ra-1】【Ra-2】【Ra-3】のヒアリング内容

[3] 草刈りいうても本当にその日7時からお昼過ぎまでびっちらかかるぐらいこはもう道が長いね。そういうのにも始め一番初めもできたときから参加させてもらって村の方とはね、そういう意味では知らない人がないぐらいだったんですよ。【Ra-1】
[4] 空き家にグループホームを移転しようとしたんですけど、理解のある人ばかりじゃなくて、利用者さんとの面識もなかったりとか。今後僕らも地域のの人に、まず存在を知ってもらって活動っていうのはやっぱり積極的に参加するようにはします。【Ra-2】
[5] はじめの一歩みたいところでここ2年ぐらいやってこの後、小学校に管理も草刈りだけお願いできないかと、そういう話もあるかも。【Ra-3】
[6] 利用者さんと職員の人とはからへんところいっぱいあるじゃないですか、そこは地元の人がお手伝いに行っってね、アルバイトみたいな形でちょっといただくという。【Ra-1】 住民

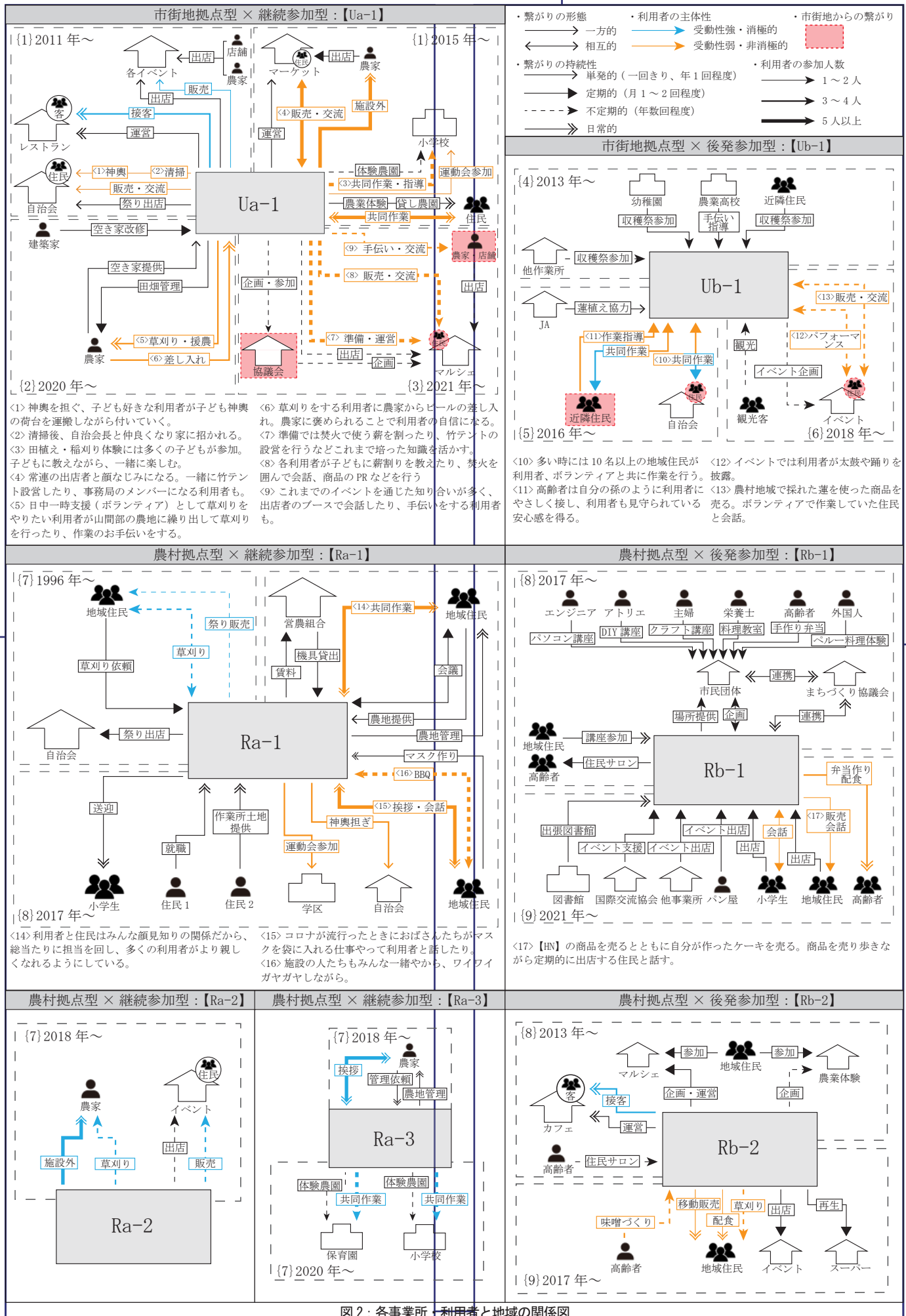


図2：各事業所・利用者と地域の関係図

4)農村拠点型 × 後発参加型

(i) 農村地域での関係構築 (図2-8)

【Rb-1】【Rb-2】は設立当初から高齢者向けの住民サロンや体験農園など事業所主体のイベントを開催している。【Rb-1】においては、2020年からアートや料理を通じた地域交流活動を行う市民団体と連携し、拠点で様々な講座を開催することで、講座参加者との関係を築いている。

(ii) 農村地域での活動の展開 (図2-9) 【Rb-1】は昨年から地域住民による持ち寄り市を月に1回開催している。このイベントには講座の参加者の多くが出店者やお客さんとして参加しており、市民団体との連携による繋がりが拠点の中で発展をみせている。利用者も1～3名ほど参加しており、常連の出店者やお客さんに自分の作った商品を売り歩くなど、主体的に活動がみられる^{〔17〕}。

3. 農村地域における利用者と地域の協働の効果

立地タイプと利用者参加タイプによる特徴を踏まえ、利用者・事業所と地域の協働の効果を述べる。

3-1. 社会的弱者の能動性の獲得

利用者と高齢者やニートなどの社会的弱者の関係性の特徴を分類ごとに述べる。

(1)農村拠点型 × 継続参加型

利用者と社会的弱者の両者に主体的な役割が付与され、対等に関わる中で社会的弱者がやりがいを獲得する「相互扶助型」の特徴がある。

【Ra-1】は現在4件の住民の農地を管理しており、管理を【Ra-1】が担うことで地域の中で耕作を継続させている。日常的な農作業には6名程の住民、田んぼの草刈りには地域の半分の8世帯程の住民が参加している。作業の中では、技術と知識に優れた高齢者が利用者に教える一方で、力仕事や人手が必要な作業は利用者が率先して行うなど、対等な関係が築かれており

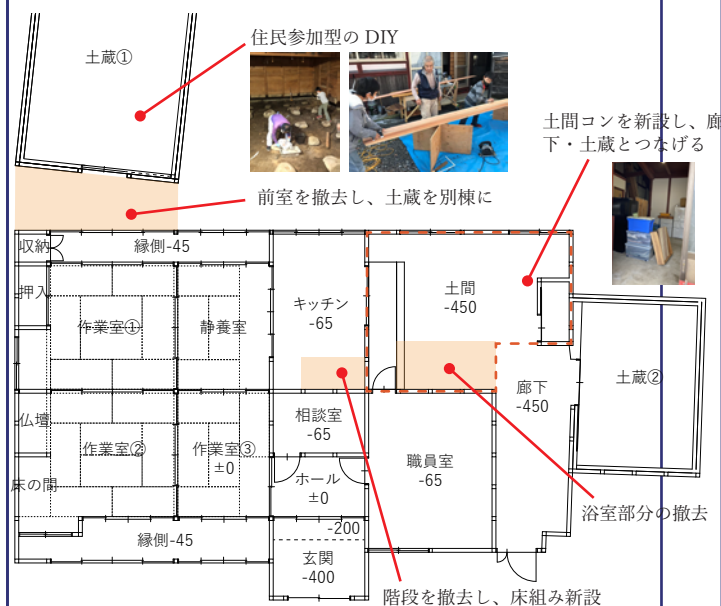


図3: 【Rb-1】の古民家改修内容

〔18〕、利用者の働く場になるとともに高齢者の日中の居場所、習慣にもなっている^{〔9〕}。

(2)農村拠点型 × 後発参加型

積極的に活動する利用者に関わることで社会的弱者の参加意欲が向上し、地域コミュニティへの参加の機会を得る「触発型」の特徴がある。

【Rb-1】は地域の古民家を改修し、拠点として土蔵の1つを市民団体の活動場所として提供しており、改修は市民団体が中心となっており、地域の子どもやボランティアが参加しながら進めている。建物の改修時から地域住民が関わることで、事業所に対する理解を得るとともに、イベントへの参加にも繋げている。

【Rb-1】が開催する地域住民による持ち寄り市 (図4) では利用者が出店していた小学生とお互いに作った商品について話をしたり、自作のケーキを高齢者のお客さんにおすすめするなど、イベント内で主体的に活動している。自分で作ったものを買ってもらいたいという利用者がその機会を得るとともに、高齢者のイベントへの参加のきっかけにもなっている^{〔10〕}。【Rb-2】の地域周辺では伝統食を昔ながらの製法で作りを続けている高齢者が多いが、高齢化による後継者不足が問題となっている。【Rb-2】では利用者が高齢者の指導を受けながら、味噌やお漬物、梅干しを作っている (図5)。利用者は地域の文化を理解することができ、高齢者は前向きな利用者と触れ合いながら地域の役に立つことで生活の中でのやりがいを獲得している^{〔11〕}。

(3)市街地拠点型 × 後発参加型

受け身の利用者を支える役割を付与されることで社会的弱者が主体性を獲得するとともに、後に主体性を高めた利用者が地域内で活動を還元する「利用者還元型」の特徴がある。

【Ub-1】では利用者と市街地と農村地域の高齢者や引きこもりの若者が、農作業や内職作業などで協働し



図4: 【Rb-1】拠点での持ち寄り市



図5: 高齢者の味噌づくり指導^{〔5〕}



図6: 作業を教える高齢者^{〔6〕}



図7: 太鼓を披露する利用者^{〔6〕}

ている。高齢者は利用者を常に気にかけて作業を丁寧に教える（図 6）、引きこもりの若者は自分以外にも困った人が地域の中にいるということを実感し、働くモチベーションになる^[12]など、利用者を受け入れることで参加者の心境に変化がみられる。その後、主体性を高めた利用者はイベントでのパフォーマンス（図 7）、カフェの営業^[13]などを通して地域との関わりを増やしている。

3-2. 生活環境の持続

(1)景観

【Ra-1】の地域は集落から見下ろす棚田が重要な景観資源となっている。【Ra-1】による農地の管理は、農地が荒れたり、太陽光パネルなどに置き換わることを防ぎ、地域の景観を守る役割を果たしている^[14]。

(2)雇用の創出

【Ra-1】では現在、Uターンにより帰省した若者が2名、職員として働いている。【Ra-1】が仕事を提供することで、帰省のハードルが軽減され、地域内に若者と子供を呼び込むことに寄与している。また、若者やその子供は高齢者に対して日頃から挨拶をするなど、地域内で多世代の交流が生まれている^[15]。

(3)日常生活

【Ra-1】は利用者の送迎の際に一緒に小学生の送迎を行っている^[16]。【Rb-2】は住民の要望を受け、地域の病院と連携して、病院の送迎バスでの小中学生の送迎サービスを導入している^[17]。また、【Ra-1】は郵便

表 5：ヒアリング内容

[7] 草刈りとかすると施設の人と一緒に仕事するやろ。おっちゃんって言うてきてくれるし、そんなんあつかい言うても怒らずにいうこと聞いてくれるし、中には絶対僕らの言うこと聞かへん人もおるけどな。【Ra-1】住民
[8] 何しろ全員、うちは素人ですしね。村の方に教えていただきながら、水の管理も抜けてるとか、技術的なところは村の方に入ってもらって、労力はこっちの方で。【Ra-1】
[9] 田んぼやるとものすごい良いですね。体にいいというか、時間つぶしになるしそういう意味ではやってよかったなというのはうちも近所の主力は七十五、六の人やけど、毎日田んぼいってやっぱ元気なんですよ。この人らが田んぼなかったら何してるかなと思って。【Ra-1】住民
[10] あの子が作ったケーキ美味いからイベントのときは毎回買わしてもらってるんです。ほかにいろいろ売ってたりもするしね。【Rb-1】住民
[11] 味噌つくりの時はね、豆つぶしてもらって麴と合わせてもらって、おにぎりにしてもうんやけど、結構喜んでやってくれる。【Rb-2】住民
[12] 高齢者の人は慈愛をもって障害のある人を見てくれるし、引きこもりの子は自分より困った人も頑張ってるっていうのがなんかいいなと思って、いろんな人がいる、自分よりも困った人がいるっていうのはモチベーションにつながるかなって。【Ub-1】
[13] 夏場3か月くらい限定でカフェをやるんやけど、もうメイドさんはほとんど高齢者と利用者さん。自分らで当番制にして「この日人少ないからだれか出なあかん」ってシフト組んでやってはる。【Ub-1】
[14] もう営農組合と【Ra-1】に任した田んぼ以外は全部ちよっともうやめて太陽光にしたりした。【Ra-1】住民
[15] 若い子が帰ってくれたのが一番良かったな嬉しかったな。幼稚園、保育園児がおるっていうのがな、1人でも2人でもいるっていうのがもうほんまありがたいことやな。おかげさんでそういう若い子でも子供でもわしの顔見たら手あげるし挨拶もしてくれるしな、それは喜んで。【Ra-1】住民
[16] グループホームと新しい事業所のところと駅の3ヶ所、送迎しています。村の小中学生が学校まで遠いので、一緒に送迎したりもしていた。【Ra-1】
[17] 空で病院に行くんだったらからで代わりにそこに学生のせてよっていう提携をして、今病院が送ってくれるっていうシステムができて。【Rb-2】
[18] 郵便ポストがあるんですけど、ポストはある程度利用がないと撤去されるらしいんですね。うちは年賀状ですとか、年賀状も3、400枚。日頃の切手も全部そこで必ず買うようにしてるんです。【Ra-1】
[19] 配食のためには若者たちが動いたりする。配達するのを職員がやるんじゃなくて、この利用者の人たちがやってお給料が入ってくる。【Rb-2】

を出す際に地域内のポストを利用したり、切手などを買う際も地域内で購入したりして、地域の郵便サービスの維持に努めている^[18]。このように、交通の便が悪い農村地域においては事業所が地域の生活機能を支援する役割を果たしている。【Rb-1】【Rb-2】は利用者が地域内の高齢者に対して、お弁当の配食を行うことで高齢者の見守りの役割を果たしている^[19]。

3-3. 小結

利用者との協働により、高齢者や引きこもりなどの社会的弱者は地域内で居場所ややりがいを見出すことで能動性を獲得している。市街地拠点型では、主体性をもった利用者と社会的弱者が関係人口として活動することで農村地域に新たな活力をもたらしている。農村拠点型では、耕作放棄地での共同作業や伝統の継承など、従来では拾うことが難しかった地域資源を活用した利用者と社会的弱者のコミュニティが形成されており、両者の関係性が地域資源の賦活に寄与している。

4. 結論

一人一人異なる特性をもつ利用者が主体性をもって地域内で活動することで利用者を介した多角的なつながりが生まれる。市街地拠点型において、継続参加型では市街地での利用者の積極的な参加による繋がりが農村地域での速やかで多様な活動展開を可能にしている。後発参加型では、利用者を支える役割をもつ社会的弱者と、支援を受けることで徐々に主体性を高めた利用者が地域内で協働することにより、農村地域活性化の新たな担い手となる可能性を有する。農村拠点型において、継続参加型では利用者と高齢者が時間をかけて協働することで、対等な関係性が構築される。両者は地域内のあらゆる課題の解決に主体的に取り組むことで、地域活性化の中心的な役割を担う。後発参加型では事業所と地域のコミュニティ内での利用者の主体的な活動が地域内の社会的弱者のコミュニティへの参加を促している。

このように、事業所の立地、利用者の参加タイプごとに、多様な利用者と地域住民の関係がみられる。農村地域での利用者主体の活動は地域資源の新たな活用による住民のやりがいや居場所の創出、地域課題の解決に寄与するとともに、社会的弱者の主体的参加を促し、地域全体を包括したコミュニティを創出する可能性を有している。

【参考文献】

- 厚生労働省：障害者の就労支援対策の現状
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaisahukushi/service/shurou.html（2022年12月21日閲覧）
- 本田恭子・渋谷直樹：就労継続支援にもとづく農福連携の現状－岡山県と大分県を事例に－、環境情報科学 学術研究論文集 32, 2018
- 小柴有理江・吉田行郷・香月敏孝：農業と福祉の連携の形成過程に関する研究－農業分野における障害者就労を事例として－、農林水産政策研究第25号、p1-17, 2016.1
- 農林水産省：農福連携等推進ビジョン
<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/nousui/dai25/siryou4-2.pdf>（最終閲覧日 2022年12月22日）
- あいとうふくしモール | Facebook
<https://www.facebook.com/aitoufukushimall>（最終閲覧日 2023年1月14日）
- 特定非営利法人 つどい | Facebook
<https://www.facebook.com/npotudoi>（最終閲覧日 2023年1月11日）